

# 同格名詞句の構成原理と前提-焦点構造

## Nominal Appositions and Presupposition-Focus Structure

山森 良枝  
Yoshie Yamamori

同志社大学  
Doshisha University  
yy080707@gmail.com

### 概要

本論では、「我々日本人/we Japanese」のように、文中で同じ役割を担い、同じ対象を表す2つの名詞句 N1、N2 が並列した構造を持つ [N1 N2]型の同格名詞句 (nominal apposition) を対象にその構成原理について考察する。日本語の同格名詞句に関するこれまでの研究では、N2 が(意味の中心となる)主要部、N1 が N2 を修飾する補足部をそれぞれ構成すると見なされてきた (小林,1996/森山,2016)。ところが、近年、コーパスからの収集結果に基づけば、N2 が主要部、N1 が補足部とは限らないことが明らかになり、同格名詞句の N1 と N2 の間にコピュラ文「A は B だ」における A と B の関係を仮定する分析が提案されている(眞野,2018)。しかしながら、「エリザベス女王」「我々日本人」はどちらも「エリザベスは女王だ」「我々は日本人だ」というコピュラ文に還元できるものの、「エリザベス女王」の倒置形「女王エリザベス」が認可されるのに対して、「我々日本人」を倒置した「\*日本人我々」は認可されない、という違いがある。その要因を説明するためには、さらなる考察が求められる。本論では、Abrusán (2016)、西山(2003)の前提とコピュラ文に関する研究を踏まえて、倒置可能な「女王エリザベス」と倒置できない「\*日本人我々」の文法性の違いが、N1 と N2 の間の前提-焦点構造、とりわけ前提のタイプの違いに起因することを示して、これまであまり議論されてこなかった情報構造の語形成に及ぼす影響を明らかにする。

キーワード：同格名詞句 (nominal apposition), 前提 (presupposition), 焦点 (focus), コピュラ文 (copula sentence)

### 1. はじめに

本論では、文脈と語形成との相互作用について検討するため、[N1 N2]型の日本語の同格名詞句 (nominal apposition) について分析を行う。同格名詞句とは、「我々日本人/we Japanese」のように、文中で同じ役割を担い、同じ対象を表す2つの名詞句

N1、N2 が並列した構造を持つ形式を指す。同格名詞句は多くの言語で観察されるが、日本語の同格名詞句に関する先行研究は少なく、その統語構造や意味構造は未だ十分に解明されていない。

これまでの研究では、同格名詞句[N1 N2]は、N2 が主要部、N1 が N2 を修飾する補足部をそれぞれ構成する (小林, 1996/森山,2016) と言われてきた<sup>1</sup>。しかし、近年、コーパスからの収集結果に基づいて、N2 が主要部とは限らず<sup>2</sup>、むしろ、同格名詞句の N1 と N2 に対しては、コピュラ文「A は B だ」で観察される A と B の関係を投影するという分析が提案されている(眞野, 2018)。ところが、「エリザベス女王」「我々日本人」はどちらも「エリザベスは女王だ」「我々は日本人だ」というコピュラ文に還元できるものの、「エリザベス女王」の倒置形「女王エリザベス」が認可されるのに対して、「我々日本人」を倒置した「\*日本人我々」は認可されないという違いがある。その要因がどのようなものであるかを明らかにすることは、同格名詞句の構成原理を解明するうえで重要な課題であり、さらなる考察が求められる。

そこで以下では、倒置可能な「女王エリザベス」と倒置できない「\*日本人我々」の文法性の違いに着目し、その違いが N1 と N2 の間に成立している前提-焦点構造のうち、主として前提のタイプの違いに起因する現象であることを示して、これまであまり議論されてこなかった情報構造が語形成に及ぼす影響について検討する。

### 2. 同格名詞句

眞野(2016:27)は、同格名詞句が満たさなければならない条件として以下の3つの条件を提案してい

れ、N1 に現れる「ユウキロックさんご本人」や「ヴィクトリア英女王」への視点を欠いていたことが、<N2 が主要部、N1 が補足部>を構成する、という小林の(偏った)主張の要因である、と言う。

<sup>1</sup> 「主要部」「補足部」については、脚注6を参照のこと。

<sup>2</sup> 眞野(2016:39)によれば、小林(1996)が考察対象とした同格名詞句は、「我々日本人」や「祖国日本」のように固有名詞が N2 として現れる事例に限定さ

る<sup>3</sup>。本論でも、この3条件を充たすものを同格名詞句と見なすことにする。

- (7) (音)アクセントが一語化しないもの  
 e.g. ベトナム+りよこう  
 →ベトナムりよこう (複合語)  
 (下線部は低アクセント部、非下線部は高アクセント部を表す。)
- (イ) (格)どちらかの名詞句を削除しても文法的なもの
- (ウ) (意味)指示対象が同じであり、片方の名詞句を削除しても意味が変わらないもの

(7)-(ウ)の3条件を同時に満たす同格名詞句では、以下のデータが示す通り、普通名詞、固有名詞、人称代名詞、指示代名詞等がN1、N2の要素となる。ただし、先述したように、同格名詞句には、[N1 N2]を倒置した[N2 N1]型の倒置形を許すものと許さないものがあり、後者では、語順に関する制約が生じることになる。

#### A. 倒置不可：

- (1) a. 我々日本人  
 a'. \*日本人我々  
 b. ここ首都東京  
 b'. \*首都東京ここ  
 c. 父覚恵  
 c'. \*覚恵父
- (2) a. ユウキロックさんご本人  
 a'. \*ご本人ユウキロックさん
- (3) a. 隣国美濃

<sup>3</sup> 眞野(2016)では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)から、中納言 1.1.0 の長単位検索を使用して抽出した「固有名詞+名詞+格助詞」の形式 35,322 件、および、「名詞+固有名詞+格助詞」の形式 14,273 件から、(7) (イ) (ウ) の条件を満たさない事例を除外した残りが分析対象とされている。

以下の表は、「固有名詞と共に生じる名詞句の種類と出現位置」をまとめた眞野(2017)の[表 1]を一部改変した形で書き写したものである。(以下の一覧に含まれる名詞句のタイプを表す用語は眞野(2017)の用語を用いている。また、表・右側の番号は本論の本文中の事例番号に対応している。)

- a'. \*美濃隣国  
 b. 首位近鉄  
 b'. \*近鉄首位  
 c. 百獣の王ライオン  
 c'. \*ライオン百獣の王
- (4) a. ツアコン藤木さん  
 a'. \*藤木さんツアコン  
 b. 元芸人ユウキロックさん  
 b'. \*ユウキロックさん元芸人

#### B. 倒置可：

- (5) a. イギリス首相チャーチル  
 a'. チャーチルイギリス首相  
 b. 京都大学特別教授本庶佑  
 b'. 本庶佑京都大学特別教授
- (6) a. 花の都パリ  
 a'. パリ花の都  
 b. 千年の都京都  
 b'. 京都千年の都

統語上の制約として先行詞を必要とする照応形の「ご本人」がN2に生起する(2)を除けば、倒置を許さない(1a-c)の「我々/ここ/父」、(3a,b)の「隣国/首位」、および、(4a,b)の「ツアコン/元芸人」はN1にしか現れない。これに対して、倒置を許す(5a,b)(6a,b)の「イギリス首相/京都大学特別教授/花の都/千年の都」および「チャーチル/本庶佑/パリ/京都」は、N1、N2のどちらにも現れることができる。

ただし、(5a,b)(6a,b)では常に固有名詞が同格名詞句全体の意味の中心を表す主要部を構成する。そのため、N2を主要部、N1を補足部とする小林(1996)、

名詞句	位置：NP1/NP2	例
再帰代名詞	× ○	(2a)
人称代名詞	○ ×	(1a,b)
親族名称	○ ○	(1c)
属性(肩書き)	○ ○	(5a,b)
属性(その他)	○ ×	(4a,b)
非飽和名詞句	○ ×	(3a)
別称(言い換え)	○ ×	(6a)
状態名詞	○ ×	(3b)

(眞野, 2017)

本論では眞野(2016)で採用されたデータを中心に考察を進める。

森山(2016)の分析では、(5a,b)(6a,b)の同格名詞句の主要部が常に固有名詞になる、という事実を捉えられないことになる。それでは、眞野(2018)が主張するように、どの同格名詞句の N1 と N2 の間にもコピュラ文「AはBだ」の形式を持つ「主題-題述」関係が成立するのだろうか。例えば、(4a)と(5a)を見てみると、(4'a)とその倒置形の(4a')も、また、(5'a)とその倒置形の(5'a')も成立するように、(4a)(5a)の N1 と N2 を「AはBだ」の A、B に置き換えたコピュラ文を作ることができる。

- (4') a. ツアコンは藤木さんだ  
(ツアコン藤木さん)  
a'. 藤木さんはツアコンだ  
(\*藤木さんツアコン)
- (5') a. イギリス首相はチャーチルだ  
(イギリス首相チャーチル)  
a'. チャーチルはイギリス首相だ  
(チャーチルイギリス首相)

しかし、(5a)の倒置形(5a')は認可されるが、(4a)の倒置形(4a')は認可されないように、2つの倒置形の文法性は同じではない。この文法性の違いを、同格名詞句の N1 と N2 の間にコピュラ文「AはBだ」と同じ「主題-題述」関係を仮定するだけでは説明することができない。そもそも、同じ指示対象を表す同格名詞句の構成要素 N1,N2 を機械的に「AはBだ」の A,B に投影すれば、コピュラ文ができあがるのは自然なりゆきである。例えば、上の(4'a,a')(5'a,a')のように、N1 と N2 は同じ指示対象を持つので、N1 と N2 のどちらを A,B に投影してもコピュラ文ができあがる。しかし、ここで重要なことは、それがどのような情報構造に結び付けられてのことであるのかという点にあるのであり、(4a)と(5a)の文法性の違いがなぜ生じるのかに着目して、N1 と N2 の間にある前提-焦点構造などの情報構造が同格名詞句の形成に及ぼす影響について明らかにする必要がある。

<sup>4</sup> この存在前提に関する Abrusán (2016:184)の分析は以下の通りである。

Assume, as is standard (cf. Heim and Kratzer 1998) that the denotation of a relative clause is a lambda-abstract ( $\lambda x$ . broke the typewriter (x)).

### 3. 同格名詞句と情報構造

N1 と N2 の間にある情報構造について検討するために、まず、前提-焦点構造に関するこれまでの議論を概観することからはじめよう。

#### 3.1 前提の多様性

「ある文の前提はその文の焦点部分を変項で置き換えることができる」(Chomsky, 1970)と言われるように、伝統的に、焦点(focus)は存在前提を伴うと見なされてきた。その後の焦点に関する意味論研究は、焦点は先行文脈が与える非-焦点要素を前提として持つという<弱い条件>を仮定する Rooth(1992, 1996)らと、非-焦点要素は存在前提を伴うという<強い条件>を仮定する Abusch(2010)らの流れに大別される。

Abrusán (2016)は、一般的に焦点の背景/前提は文脈内の照応解決(anaphora resolution)による複雑で予測可能性の低い過程を経て見いだされる傾向がある一方、例えば(7a)の it-cleft では、焦点 Bill の背景/前提となる (7b)の疑問文が、it-cleft 文の (who 以下の)関係節として統語的に与えられているように、質問/前提を構成する it-cleft 文の関係節と 質問への答え/焦点となる Bill の間には、通常の前-焦点よりも強い結び付きがあり、it-cleft 文の焦点は存在前提を持つ、と言う<sup>4</sup>。

- (7) a. It is [Bill]<sub>F</sub> [who broke the typewriter]<sub>Q</sub>  
[タイプライターを壊した]<sub>Q</sub>のは[ビル]<sub>F</sub>だ  
b. Background question: Who broke the typewriter? (⇒ 焦点(候補の)集合)  
c. Presupposition generated: Somebody broke the typewriter. (⇒ 存在前提)

また同時に、Abrusán (2016)は、(8)の定名詞句 *the German* は唯一性を持った特定の指示対象の存在を前提として持たず、また、(9)の一人称代名詞 *I* も非-焦点要素の集合を前提として持たないことから、

From this the Hamblin-style question denotation ( $\lambda p. \exists x. [p=\lambda w. \text{broke the typewriter (x) (w)}]$ ) can be recovered straightforwardly. Thus there is no ambiguity as to the identity of the background question that the it-cleft answers.

一般的に焦点は(前提のトリガーとして)何がしかの前提を持つとされるが、存在前提を持つ *it-cleft* 文の焦点 (cf.(7a)) がある一方、前提のトリガーと見なされる定記述や一人称代名詞にも、唯一的な対象を前提としない定記述(cf.(8))や、前提としての非-焦点集合を持たない一人称代名詞(cf.(9))があり、全ての焦点が存在前提を伴うわけではない、と述べている。(8)(9)の下付き F は焦点を表す。)

- (8) John only talked to the GERman F professor.  
 (9) Only IF did my homework.

以上を頭において、次のセクションでは、A,B 両タイプの同格名詞句の前提-焦点構造がどのようなものかについて具体的に見ることにしよう。

### 3.1.2 It-cleft 型[焦点-前提]構造と B 型同格名詞句

まず、(5)(6)の同格名詞句(以下に再録)は、N2 が *it-cleft*/擬似条件文の焦点と同じタイプの焦点を表し、N1 がその焦点が結び付けられるべき背景/前提となる質問に対応する情報構造を持つと考えられる。

- (5) a. イギリス首相チャーチル  
       a'. チャーチルイギリス首相  
       b. 京都大学特別教授本庶佑  
       b'. 本庶佑京都大学特別教授  
 (6) a. 花の都パリ  
       a'. パリ花の都  
       b. 千年の都京都  
       b'. 京都千年の都

なぜなら、先述したように、Chomsky (1970) によると、「ある文の前提はその文の焦点部分を変項で置き換えることができる」が、(5a,b)(6a,b)では、「チャーチルパリ」などの N2 が焦点、そして、「イギリス首相/花の都」などの N1 が(焦点の N2 をその値として与える変項-「誰/何処」-を含む)命題関数として与えられているからである。

これは、先述した *it-cleft* 文の焦点と(前提を提供する)関係節の間にある情報構造と同じ情報構造であり、両者の類似性は、(5a,b)(6a,b)の意味を、次のような[質問-回答]を表す文で言い表すことができ

ることによって確認できるだろう。

- |        | <u>N1(前提/質問)</u> | <u>N2 (焦点/答え)</u> |
|--------|------------------|-------------------|
| (5) a. | 誰がイギリス首相かという     | それはチャーチルだ         |
| b.     | 誰が京都大学特別教授かという   | それは本庶佑だ           |
| (6) a. | 何処が花の都かという       | それはパリだ            |
| b.     | 何処が千年の都かという      | それは京都だ            |

西山(2003)によると、(5a)の N1 「イギリス首相」のように前提を与える名詞句は、命題関数を表す「変項名詞句」、そして、これと ((5a)の N2 「チャーチル」のように) その変項に値を与える焦点名詞句を要素に含むコピュラ文は、(10a)のように「倒置指定文」と呼ばれ、倒置指定文は、(10b)の「指定文」と呼ばれる文と、主語名詞句と述語名詞句を倒置した関係にあると言う。

- |        |             |             |         |
|--------|-------------|-------------|---------|
| (10)a. | <u>(前提)</u> | <u>(焦点)</u> |         |
|        | この火事の原因は放火だ |             | (倒置指定文) |
| b.     | <u>(焦点)</u> | <u>(前提)</u> |         |
|        | 放火がこの火事の原因だ |             | (指定文)   |

このような「指定文」と「倒置指定文」の関係を同格名詞句に投影して言うと、以下に示す通り、(5a,b)と(6a,b)が倒置指定文、また、(5a',b')と(6a',b')が指定文に対応した情報構造を持ち、N1 と N2 の倒置可能性は、(5a, b)と(5a',b')の関係と(6a, b)と(6a',b')の関係が、倒置指定文と指定文の関係と共通したものであるためである、と説明することができる。

- (5) a. イギリス首相はチャーチルだ (倒置指定文)  
       a' チャーチルがイギリス首相だ (指定文)  
       b. 京都大学特別教授は本庶佑だ (倒置指定文)  
       b'. 本庶佑が京都大学特別教授だ (指定文)  
 (6) a. 花の都はパリだ (倒置指定文)  
       a'. パリが花の都だ (指定文)  
       b. 千年の都は京都だ (倒置指定文)  
       b'. 京都が千年の都だ (指定文)

では、N1 と N2 の倒置可能性がない A タイプの同格名詞句では、N1 と N2 の間にどのような情報構造が存在しているのだろうか。次のセクションではこの点について考察する。

### 3.1.3 定記述の前提と A 型同格名詞句

N1 と N2 の倒置ができない A タイプの同格名詞句と倒置が可能な B タイプの同格名詞句の違いは、それぞれの N1 の違いを比べてみると、さらに明確になる。

A タイプの同格名詞句では、B タイプの同格名詞句とは異なり、固有名詞が N2 にしか生起できない。この制約は、A タイプの同格名詞句の N1 と N2 の間には倒置可能性がないためであると説明できるだろう。

しかし、両タイプの N1 には明確な違いがある。これは、N1 に来る名詞句の意味から生じていると分析すべきものである。§ 3.1.1 では、存在前提を持つ *it-cleft* 型の焦点に対して、存在前提や非-焦点集合を（前提として）持たない焦点があることについて触れた(Abrusán, 2016)。A タイプの同格名詞句の N1 を具体的に見てみると、話者を起点に唯一的に指示対象が同定される一人称代名詞((1a))、指示詞((1b))、場所名詞((3a))および親族名称((1c))と、順位や序列の尺度の最上位の要素を表す名詞句(3b,c)があり、これらは、文脈情報から指示対象が唯一的に決まる指示的名詞句として、存在前提を導入することができる、と特徴化することができるだろう<sup>5</sup>。一方、B タイプの同格名詞句は、N1 が特定の指示対象を持たず、変項名詞句として非-焦点要素の集合を導入する、という特徴を持つ。

以上のように、A, B どちらのタイプの同格名詞句においても、N1 が前提を導入すると考えることが妥当であるとする、N2 に生起する固有名詞については、西山(2003:126)が、例えば「田中太郎」には、特定の個体を指示する指示的読みと、「[田中太郎]という名前の持ち主」という性質を表す叙述名詞句(非指示的名詞句)として主語の指示対象にその属性を帰す読みがあり、2 通りに曖昧である、と述べてい

るように、2 通りの解釈があることになる。

そこで、西山の分析を N2 の固有名詞に適用すると、まず、A タイプの同格名詞句の N2 の固有名詞には後者、つまり、N1 に生起する指示的名詞句の性質を表す叙述名詞句(非指示的名詞句)が当てはまり、また、B タイプの同格名詞句の N2 の固有名詞は前者、つまり、特定の個体を指示する指示的読みをもつ指示的名詞句が当てはまる。

西山(2003:123)によれば、「A の指示対象について B で表示する属性を帰す」コピュラ文「A は B だ」は「措定文」と呼ばれ、本来的に指示的な人称代名詞、直示表現や照応形などは、叙述名詞句にはなり得ず、措定文の B 位置に生起することができない、と言う。従って、(11)が示すように、措定文は倒置できない、と特徴化することができる。これが措定文の情報構造上の意味であり、A タイプの同格名詞句も措定文と同じ情報構造を持つ、と言うことができるだろう。

#### (11) (指示的名詞句) (叙述名詞句)

- a. あの人は 病気だ  
→\*病気があの人だ  
b. あの人は バカだ  
→\*バカがあの人だ

従って、(1a-c)の同格名詞句の N1 と N2 を要素として含むコピュラ文でも（文の意味を変えずに）N1 と N2 を倒置できないということになり、A タイプの同格名詞句は、(1')が示す通り、措定文と同じ情報構造を持つ、と特徴化することができる。そして、この特徴が N1 と N2 の倒置不可能性の原因である。

- (1')a. 我々は日本人だ  
a'. \*日本人が我々だ  
(日本人役の配役結果を述べる場合は指定文として OK)  
b. ここは首都東京だ  
b'. \*首都東京がここだ  
(地図を指して言う場合は指定文として OK)  
c. 父は覚恵だ

<sup>5</sup> ただし、(4a,b)の同格名詞句は（N1 と N2 の倒置が認可されない）A タイプに属するが、N1 に含まれる「ツアコン/元芸人」の普通名詞句は、指示的名

詞句ではない。このことについては、以下で触れる。

- c' ?覚恵が父だ  
 (「父」の配役を言う場合は指定文として  
 OK)

ただし、A タイプの同格名詞句の中には、措定文以外に、倒置指定文とほぼ同じ意味を表していること分析することができるものもある。(3a-c)を例に、この点を、もう少し明確にしてみよう。

例えば(3' a)のコピュラ文の主語名詞句「隣国」は「xは隣国である」という意味を表す変項名詞句を表し、述語名詞句の「美濃」はxの値を表している、と言える。この場合、(3' a)は倒置指定文である、と見なすことができる。倒置指定文である、ということは、(3'a)を倒置した(3'b)の指定文への言い替えができるということでもある。

- (3'a. 隣国は美濃だ  
 a' 美濃が隣国だ  
 b. 首位は近鉄だ  
 b'. 近鉄が首位だ  
 c. 百獣の王はライオンだ  
 c' ライオンが百獣の王だ

しかしながら、(3a-c)の同格名詞のN1は、deicticに指示対象が決まる「隣国」、プロ野球の順位や獣の順位の尺度の最上位を表す「首位」「百獣の王」であり、これらを指示的名詞句として解釈すると、N1に変項名詞句を含む倒置指定文の情報構造と矛盾するという問題にぶつかることになる。即ち、西山(2003:96)が、「対象の存在をまず肯定し、それについて性質を述べるという思考と、変項をもつ命題を考え、その変項を具体的な値で指定するという思考とはまったく異質である」と言う通り、(3a-c)が指定と措定のどちらであるかをどのように区別するか、といった問題である。

この点についてはまず、(3'a)には倒置指定文の読みができるが、(3a-c)のN1が指示的名詞句であることについては、次のような変化動詞と共起できないことから確認することができる。

- (12) a.\* 隣国が変わった  
 b.\* 首位(である近鉄)が変わった  
 c.\* 百獣の王が変わった

さらに、(3a-c)の同格名詞句のN1とN2は倒置できないこと、しかも、本来的に指示的な人称代名詞、直示表現や照応形は、措定文の叙述名詞句になり得ないこと(西山,2003)を考慮すると、(3a-c)の同格名詞句は指定文に対応する情報構造上の意味を表す、と考えられる。

これが、(3a-c)の同格名詞句の典型的な意味だと考えられる。そこで、このN1名詞句の指示的名詞句である、という情報構造上の意味に基づいて、同格名詞句全体の意味を予測しようとする、今度は、Aタイプの同格名詞句に分類される(4a,b)のN1「ツアコン/元芸人」は指示的名詞句でなければならないが、普通名詞の「ツアコン/元芸人」を指示的名詞句として解釈するわけにはいかない、という新たな問題にぶつかることになる。

- (4'a. ツアコンは藤木さんだ  
 a'. 藤木さんがツアコンだ  
 b. 元芸人はユウキロックさんだ  
 b'. ユウキロックさんが元芸人だ

即ち、「ツアコン/元芸人」を変項名詞句であると見なせば、(4' a,b)は(4' a', b')の指定文を倒置した倒置指定文となり、(4a,b)はAタイプの同格名詞句ではなくなってしまう、といった問題である。

このようなN1名詞句の解釈が関ってはいるものの、どの同格名詞句がAタイプあるいはBタイプに分類されるかについての最も明白な基準は、N1とN2の倒置が認可されるか否かということである。従って、(4a,b)の同格名詞句ではN1とN2の倒置が認められないので、N1とN2の倒置を可能にする情報構造を持っていないから倒置指定文は、(4a,b)の情報構造上の意味としては不備がある。むしろ、同格名詞句自体の意味を考えると、(4a,b)は、N2の固有名詞の属性をN1の普通名詞が表す次のような措定文の意味を表していると思えることができる。

- (13) (指示的名詞句) (叙述名詞句)  
 a. 藤木さんはツアコンだ  
 b. ユウキロックさんは元芸人だ

そこで、(4a,b)の同格名詞句におけるN1とN2の順序にも拘らず、倒置指定文の(4' a,b)よりも、措定

文の(13a,b)の方が、より(4a,b)に近い意味を表すという点を、N1とN2の倒置(不)可能性という観点に沿ってもう少し明確にしてみよう。

(4a,b)と同じくN1に普通名詞句、N2に固有名詞を含む同格名詞句は多く、例えば以下のような例を挙げるができる。

- (14) a. 怪盗ルパン (\*ルパン怪盗)  
 b. 泣き虫ハルちゃん (\*ハルちゃん泣き虫)  
 c. 着回し名人キャサリン妃  
 (\*キャサリン妃着回し名人)  
 d. オオカミ少年ケン (\*ケンオオカミ少年)  
 e. 嘘つき内閣 (\*内閣嘘つき)  
 f. テノールパバロッチェ  
 (\*パバロッチェテノール)

これらの事例の解釈については、明らかな一般的意味特性がある。最も明白な意味特性は、固有名詞のN2は、普通名詞のN1というカテゴリーに属するという意味を表すということである。これは、(13a,b)の措定文「N2はN1だ」の対応物であると見なすことができる。しかし、措定文の意味を表示するためには、「怪盗ルパン/泣き虫ハルちゃん」ではなく、「\*ルパン怪盗/\*ハルちゃん泣き虫」の方が適切な語順であるはずである。それにも拘らず、「怪盗ルパン/泣き虫ハルちゃん」になるのは、その方が、補足部(M)が前、主要部(H)が後ろに来るMH型という日本語で多数を占める語順の例外を許さないという意味から選好されることに加えて、そもそも倒置可能性がない措定文の情報構造を基盤とする同格名詞句において、N1とN2の語順が逆になったとしても、意味処理上、混乱が少ないことが関係している、と考えることは不可能ではない<sup>6</sup>。

従って、もしこのような考えが成立するとすれば、同じ説明を(3a-c)にも適用する余地がないわけではない。どのような分析が適切かは、当該の同格名詞句の使用文脈に依存する問題でもあり、今後の課題としたい。

<sup>6</sup> 主要部(head)とは句全体の意味と統語機能を決定する要素を指す。例えば「赤い花」の主要部は「花」であり、「花」の修飾語句「赤い」を補足部(modifier)という。「赤い花」では補足部(M)が前、主要部(H)が後ろに来るMH型の語順を持つ。動詞句

### 3.1.4 非A型/非B型の同格名詞句

§3.1.3の(14a-f)にN1とN2の倒置可能性はなかった。しかし、例えば(14f)のN1に修飾語を付加した(15a)や(15b)のようなN1には、特定の個体を指示対象として持つ指示的名詞句としての解釈が生じる。

- (15) a. 史上最高のテノールパバロッチェ  
 b. 第44代アメリカ合衆国大統領オバマ

従って、(15a,b)の同格名詞句のN1とN2をコンピュータ文に投影した(16a,b)(17a,b)は、主語名詞句と述語名詞句の両方に指示的名詞句を含むので、西山(2003)の理論に従えば、これらは、倒置が可能な(18a,b)の同定文と倒置同定文に近い意味を表す、と考えなければならない。

- (16) a. パバロッチェが史上最高のテノールだ  
 (同定文)  
 b. 史上最高のテノールはパバロッチェだ  
 (倒置同定文)  
 (17) a. オバマが第44代アメリカ合衆国大統領だ  
 b. 第44代アメリカ合衆国大統領はオバマだ  
 (18) a. 山田村長の次男がこいつだ (同定文)  
 b. こいつは山田村長の次男だ (倒置同定文)  
 (西山, 2003)

この考えを推し進めると、(15a,b)の同格名詞句ではN1とN2の倒置が可能になることが予測されるが、予測通り、(19a,b)の倒置形を作ることができる。

- (19) a. パバロッチェ史上最高のテノール  
 b. オバマ第44代アメリカ合衆国大統領

このことは、AタイプとBタイプの同格名詞句に加えて、同定文の情報構造上の意味を表す第三のCタイプとも言うべき同格名詞句があることを示している。

## 4. まとめ

(1)(3)(4)(5)の同格名詞句のN1,N2を構成する名詞句の組み合わせはI,IIのどちらかであり、情報構造の違いが倒置可能性に反映される。

「水を飲む」でも主要部の「飲む」が後ろに来るMH型の語順を持つ。語の内部でも同じ構造が見られ、日本語の複合語で最も実例が多いのは、「都市生活/流れ星/黒板」などのMH型である。

- I. N1: 存在前提を持つ変項名詞句  
N2: 変項の値を表す名詞句
- II. N1: 特定の対象を表す指示的名詞句  
N2: 属性名詞句
- III. 照応形は、先行詞を必要とするため N1 に生起し得ない。  
( ユウキロックさんご本人  
\*ご本人ユウキロックさん)

(1)(3)(4)の同格名詞句は、「措定文」と同じ II 型の情報構造を持つ。これに対して、(5)(6)の同格名詞句は、「指定文」を倒置した「倒置指定文」(西山,2003) と同じ I 型の情報構造を持つ。また、「措定文」には対応する倒置文がなく(西山,2003)、同じ情報構造を持つ(1)(3)(4)の同格名詞句には倒置可能性がない。一方、倒置指定文と同じ情報構造を持つ(5)(6)の同格名詞句には倒置可能性がある。

また、I、II のどちらにも属さないパターンとして、(15a,b)の同格名詞句は、「同定文」と同じ IV 型の情報構造を持つ。「同定文」には対応する倒置文として「倒置同定文」があり、(15a,b)の同格名詞句は(18a,b)の倒置形を持つ。

- IV. N1: 特定の対象を表す指示的名詞句  
N2: 特定の対象を表す指示的名詞句

なお、(3)、とりわけ(4)の同格名詞句についてはさらなる検討が必要であり、この結論は暫定的なものとしたい。

## 参照文献

- [1] Abrusán Márta (2016) Presupposition cancellation: explaining the ‘soft-hard’ trigger distinction. *Natural Language Semantics* 24: pp. 165-202.
- [2] Chomsky, Noam (1970) Deep structure, surface structure and semantic interpretation. Jakobson, R. & S. Kawamoto (eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics*: Tokyo:TEC.
- [3] 小林幸江(1996)「『同格』をめぐって」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』22, pp.1-13.
- [4] 眞野美穂(2016)「日本語同格名詞句についての一考察—固有名詞が含まれる場合—」福田嘉一・建石始(編)『名詞類の文法』pp.21-40. くろしお出版.
- [5] 眞野美穂(2017)「日本語同格名詞句に見る意味的階層と統語構造」関西言語学会第 42 回大会ワークショップ『名詞句に関する指示機能と叙述機能』ハンドアウト.
- [6] 眞野美穂(2018)「日本語同格名詞句から見る名詞句の機能について」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』pp.412-417.
- [7] 森山卓郎(2016)「名詞並置型同格構造」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚巳(編)『日本語文法研究のフロンティア』pp.65-82. くろしお出版.
- [8] 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房